フランソワーズはひさしぶりにバレエのレッスンへ顔を出した。
足を痛めてしまったので、ギルモア博士の許可が出るまでは踊ることは止められていたのだ。
さすがに本当のことはバレエの先生には言えず、しばらくフランスに帰らなければならなくなったので休みます、と連絡を入れていた。
先週になって博士のＯＫが出てすぐ、教室に電話をした。帰国したのでレッスンを再開したい、と。そして、都合が悪くなってしまったので、前とは違う日時のクラスに入ることはできるかと聞いてみたら、運良く都合のいい時間のクラスに空きがあった。
そして今日、これもひさしぶりに電車に乗って教室へやってきたのだった。
いつもと違う時間帯のクラスでの稽古場は、少し空気が違う気がする。
まずバレエシューズを履いて、おそるおそる身体を動かしてみる。研究所でこっそりレッスンはしていたけれど、周りの目がうるさくて全く踊っていないに近い状態だったのだ。
大丈夫、踊れる。
それがすごくうれしくて、バレエの動きがとにかく楽しくて、レッスンの時間はあっという間に終わった。
（楽しかった！）
笑顔でドアを開けると、とたんに春の匂いに包まれた。良く晴れた午後の日差しと、あたたかくやわらかな風にのって花の匂いが運ばれてくる。
朝のうちは少し曇り気味でどことなく街の色もくすんでいたのに。今は、全然違う。街の様子も生き生きしている。
その明るい春の雰囲気を少しでも長く楽しみたくて、駅までの道をわざとゆっくりと歩いた。折からの風にちらほらと舞い落ちる、咲き残りの桜の花びらを眺め。時折落ちてくる花を手で受け止めてみたり。
そんなことをしているうちに、普段の倍以上、駅まで時間がかかってしまっていた。
時計を見て驚いてから、ちょっと考える。
それでもまだ今までのクラスよりは早い時間だし、今日は博士もジョーも夕方まで出かける用があると言っていた。イワンは来週まで夜の時間に入っている。
それならゆっくり買い物して帰ろうかな。
そう決めて、フランソワーズが駅の改札のあたりからくるりと方向を変えたとき。
向こうから駅に向かって歩いてきた男性に気がついた。
足が止まる。どうしてジョーがここに？
やましいことなど無いのに、フランソワーズはとっさに彼から隠れるように移動した。
ジョーのほうはまだ彼女に気がついていないらしい。歩きながら、時折周りを気にしている様子。
多分彼の周囲を歩いている人たちはわからない。だけど、フランソワーズには、彼がただ駅に向かって歩いているようには見えなかった。
つい彼の周りが気になってフランソワーズも探ってみた。彼が追っていそうな不審人物なし。念のため探してみた、彼の秘密の連れらしい人影も無い。むしろそのことにほっとする自分が腹立たしい。
ひとり足早に改札へ向かおうとする姿に、慌ててその後を追った。
「ジョー！」
その声に振りかえって、フランソワーズが後ろにいることに驚いている。
「あれ、フランソワーズ？　どうしてここに」
「今日はバレエのレッスン。今までの時間から替えてもらったの」
「そうなんだ」
「ジョーこそどうしてこの駅に？」
「博士の用事で来たんだけど」
ばつが悪そうに、ジョーは博士から預かったらしい古い鞄を持っている。ジョー自身も、一応はジャケットを着こんではいるけれど、少しラフな格好。博士のお使いならもうちょっとどうにかできなかったのかしら、とフランソワーズはちらっと思う。
でもそのことには触れずに、彼女はジョーの手をひっぱって駅の外へと連れ出した。
「ねえジョー。急いで帰らないといけない？」
「ううん。博士も出かけてるから用件は夜報告すれば。少しくらいなら遅くなっても平気だけど」
「ね、それじゃお茶を飲んで帰らない？」
「いいよ」
「それじゃ、行きたいところがあるの」